

五 また、養和のころとか、久しくなりて

一 義和の軌跡

また、義和のころとか、久しくなりて、（確かにも）實え、二年が間、世の中騒然として、あさましき事侍りき。或は、春・夏・日照り、或は、冬・春・大風・洪水など、よからぬ事どもうち続きて、五穀(ごこつ)にござらず。空(そら)かへし、夏(なつ)穢(けい)うる當(あつ)みあつて、秋(あき)刈(かり)、冬(ひゆ)收(め)きはなし。

これによりて、國々の民、或は、地を捨てて境を出でて、或は、家を忘れて、山に棲む。まさに御界(ごくわい)始まりて、なべてならぬ法(ほ)ど行はるれど、さらばに、そのしるしなし。京の習ひ、何(なん)さづけても、源(みなもと)は田金(たね)をこそ奪(ぬ)めるに、絶えで、上の物(もの)なれば、さのみやは、捕(つか)りありん。念(おも)ひびつゝ、さまさまの財物(かわいろ)かたは、より捨(す)てば、かと思ふほどに、あまりさゝ人(ひと)なし。またも換(かわ)ふる者は、金(かな)を離(はな)れず。乞(うが)いしれば、日を経(つ)まゆく様(よう)子(こ)の魚(うお)の聲(こゑ)に叶(うづ)く。果てには、笠(かさ)も着(き)声(こゑ)耳(みみ)滿(まつ)りて、山に滿(まつ)りて。

前年の、かくの如く、幸(さいわい)して暮れぬ。明くる年は、立ち直るべきかと思ふほどに、あまりさゝ人(ひと)なし。

鴨長明『方丈記』に残している。少し難しいけれど、読んでみよう。古典が語り伝える、飢餓のすさまじさ、戦争の悲惨さを読みとれば、歴史の「うら」を知るだけでなく、「国語」の力もつくぞ。

『方丈記』全体に流れる「末法思想」と「無常」。鴨長明は、自然界のことだけではなく、むしろ人間の世界のもろさを、みごとに表している。当時の悲惨な状況と、「末法思想」及び「無常観」とを重ねて読んでみよう。

仁和寺に隣 晩睡印といふ人、かくしつつの、歩くかと見れば、即ち倒れ伏しね。築地のつら、道のほとりに、船(ふな)死(しき)ぬる者の顛(ひん)數(すう)も知らず。取り捨(す)つるわざも知らねば、異(こと)香(こう)、世界に満(まつ)らぬて、愛(めぐ)ゆくかたち。有(あ)機(き)當(あ)らぬ事多(多く)り。京の内(うち)、一条は南(みなみ)、九条より(より)西(にし)、牛(うし)倅(すく)より(より)東(ひがし)道(みち)だ。あやしき賤(せん)、山(さん)がつも力(ぢから)尽(つく)きて、道(みち)だになし。あやしき賤(せん)、轍(辙)む万(まん)き人は、自らが家(いえ)を擲(なげ)て、市(いち)に出(で)て売(う)る。人が持(も)つて、馬(うま)・車(くるま)の行き交(まわ)るはんや。轍(辙)などは、馬(うま)・車(くるま)の道(みち)だ。あやしき事(こと)は、薪(いのし)木(き)の中に、赤(あか)き丹(たん)づき、鎗(やり)など。一日が命(いのち)に及(およ)ばずとも、(まことに)いとあはれる事(こと)も侍(まつり)き。去(い)り難(ひがい)き事(こと)は、薪(いのし)木(き)の中に、赤(あか)き丹(たん)づき、鎗(やり)など。人々に見ゆる木(木)、相(あ)はりけるを、尋(たず)ねば、すぐ方にきき、古寺(こじ)に至(いた)りて、仏(ぶつ)を盜(ぬす)み、堂(どう)の物(もの)を破(はじ)り取りて、割(わ)り残(のこ)せるなりけり。

鴨長明 1155?~1216 中世隨俗文学の典型を生みだした鎌倉時代の歌人・文人。法名 莲風(れいふう)。賀茂神社の神官の子に生まれ、琵琶(びわ)ならぬ、和歌(わか)をまんんで、わかいころから両道にすぐれた才能を発揮(はつき)。後(こう)宮廷歌人(ごう)としても活躍したが、父の死後、同族間の跡(あと)争(めぐめ)いにやぶれたことをきっかけにして、出家(しゆげ)。その著書『方丈記』は、日本三大賛筆のひとつとされ、仏教文学、隨俗文学として名高い。 Microsoft(R) Encarta(R) 97 Encyclopedia.

方丈記

鴨長明

一 行く河の流れは絶えずして

人と橋との無常

行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの

水(みず)にあらず。よどみに浮(う)ぶたかたは、かつ消

え、かつ結びて、久しくとどまりたる例(たと)いなし。

世(よの)中の人に、悟(さと)ひと、またかの如(ごと)り。

世(よの)の都(みやこ)のうちに、桺(いはなぎ)と並(なが)べ、豪(ごう)きの宿(しゆく)を争(めぐ)る。

高(たか)き、聰(きよ)しき人の住(すむ)は、世(よの)々(よのよの)を経(へ)て、尽(つく)せぬ

ものなれど、これをまことかと尋(たず)ねば、昔(むか)しの家(いえ)は、無(む)なり。

りし家(いえ)は、無(む)なり。或(も)は、去年(きとねん)廻(まわ)け、今年(ことねん)遣(おと)り。

世(よの)中の人に、悟(さと)ひと、またかの如(ごと)り。



1997.9.17
No.27-1 / 2
(古典編)

鴨長明『方丈記』が語る平安時代の末期

西日本のききんが 平清盛の命運をたつ

「平氏にあらずば人にあらず」と、絶大な権力と勢力を誇った平氏も、源氏に敗れ去った。その背景にあったものは、自然災害の洪水・干旱であった。

源頼朝が伊豆で挙兵したのは、1180(治承4)年のことである。翌年の1181(養和元)年に、西日本は飢饉(うしなひ)におそれ、特に京都の飢饉は、すさまじいものであった。源頼朝が、京都に送られる物資を都の外でおさえたから、京都の飢饉の被害がひどくなつたとも言われている。絶大な権力を誇った、平清盛はその年に死んだ。時に、清盛、64歳であった。源平の戦いは、源氏の食料戦略によって、決着がつけられたと考えることもできるのだ。

当時のように、鴨長明が『方丈記』に残している。少し難しいけれど、読んでみよう。古典が語り伝える、飢饉のすさまじさ、戦争の悲惨さを読みとれば、歴史の「うら」を知るだけでなく、「国語」の力もつくぞ。

『方丈記』全体に流れる「末法思想」と「無常」。鴨長明は、自然界のことだけではなく、むしろ人間の世界のもろさを、みごとに表している。当時の悲惨な状況と、「末法思想」及び「無常観」とを重ねて読んでみよう。

(中略)

なんでやねん

高岡市立小学校 第2学年 社会科道場

1997.9.17

No.27-2 / 2
(現代語訳編)

方丈記

鶴長明

【一】行く河の流れは絶えずして　　——人と禍との無常——
川は涸れることなく、いつも流れている。そのくせ、水はもとの水ではない。よどんだ所に浮かぶ水の泡も、あちらで消えたかと思うと、こちらにできていたりして、けっついていつまでもそのままではない。

世間の人を見、その住居を見ても、やはり、この朝だ。

壯麗な京の町に競い建っている貴賤の住居は、永久になくならないものようだけれども、ほんとにそうかと一軒一軒あたってみると、昔からある家というのは稀だ。去年建てて今年建てたのもあるが、大きな家が没落して小さくなつたのもある。

住んでいる人にも同じこと。所は同じ京である、人は相変わらず大勢だが、昔会ったことがある人は、二三十人のうち、わずかに一人か二人になっている。朝死ぬ人があるかと思えば、夕方生まれる子がある。まさによどみに浮かぶうたかたとそっくりだ。

ああ、私は知らぬ、こうして生まれたり死んだりする人がどこからきて、どこへ消えてゆくのかを。また、いったい、仮の宿であるこの世で、誰のためにあくせくし、どういう因縁で豪奢な生活に気をとられるのか。そうしてあくせくした人も、その建てた豪奢な邸宅も、先を争うようにして変わってゆく、消えてゆく。といってみれば、朝顔とその露に同じだ。露が先に落ちて花が残る。残って咲いているといううちに、日が高くなって枯れてしまった。花が先にしづれて露が消えずにいることもある。消えずにはいるといつても、夕方までもつわけではない。

(中略)

【五】また、養和のころとか、久しうなりて　　——養和の飢饉——

また、養和年間のことだったか、もう年の記憶もはつきりしないが、二年間というもの、飢饉で、ひどいことがあった。春・夏、雨が降らなかつたり、秋、台風・水害など、運の悪いことが続いて、農作物がみんなだめになり、夏の田植えの行事だけがあつて、秋・冬のとり入れにぎわいはない。

そのため、諸国の大農、土地を捨てて國ざかいを出る者や、家を捨てて山に入ってしまう者が出てきた。朝廷では、いろいろな御祈禱がはじまって、尋常一様でない特別な御修法が種々なされたけれども、いっこうにそのききめがない。京という所は、とにかく何をするにも、先だつものは田舎から米が来る事であつて、それを命の綱にしているのに、それがぜんぜん来なくなつたのだから、いつまで世間体ばかりつくろっていられようか。早く立ち直ればいいが心の中では願いつつも、どうにもならないままに、いろいろな家財を片端から捨てるよう安く売って食料に代えてゆくのだが、これはたいした物だと振り出してくれる人もいない。第一、振り向い

ても見ないときたま換えてもらつても、金目ものが金目にならず、食料のほうが高くて、乞食が道ばたに多くなり、どこへ行つても不平と嘆息の声ばかり。

第一年は、こんな調子で、やっと過ぎた。翌年は何となるかと思っていると、反対で、そのうえに伝染病まで加わつて、いいほうに向かう様子はちっとも見えない。

世間の人みんなが巻きこまれて困っているのだから、どこに助けを求めるようもなく、一日一日と窮迫していく状況は、まさに、いわゆる「少水の魚」だった。しまいには、笠をかぶり、足をくるんで、かなりの身分らしいかっこうの者が、ただただ、ひもじに一軒一軒食を乞うて回るようになった。こんなに落ちぶれて、どうしていいかわからなくなつた者たちが、歩いていたかと思うと、ばたと倒れて、もう死んでいる。驚くに、道ばたに、そういう餓死者が無数にあった。死骸の取りかたづけよりもないから、死臭が、そこいらじゅうに漂つて、腐爛してゆく様子は、目もあてられないことが多かつた。

河原などときたら、馬や車も通れないほどだ。羣衆な者、木こりたちも、力が尽きて、薪も持つてこなくなったから、あてのない人々は、自分の家をこわして、薪にして市で売った。一人が持つて出た薪の値段が一日分の食料にもならなかつたという。変なのは、薪の中に赤い丹や符などのついた木がまじっていたことで、聞いてみると、どうにもしようがなくなった者たちが、古寺に行って仏像を盗み、お堂の仏具をこわして、それを薪に割つたのだ。こういう末世の、悪い時代に生まれあわせて、こんなやなことまで見なければならなかつた。

しかしまた、たいそう貧なこともあつた。別れられない妻や夫をもつた者は、愛情のより深い者のほうがきっと先に死ぬ。というのは、自分のことは次の次にして、相手がかわいそうだと思うために、たまに手に入れた食物を相手に先に食べさせるからである。だから、親子でいっしょにいるものは、きまつて、親が先に死んだ。また、母の息が絶えているのも知らずに乳のみ児が乳房にとりついているようなこともあつた。

仁和寺の隆曉法印という人が、こうして無数の餓死者が出ることを悲しみ、行きあうごとに、死者の額に「阿」の字を書いて、阿字不生の仏縁に結んでやろうとした。その人数を知りうとして、四月と五月、数えたところ、京の一条から九条まで、東京 極から朱雀大路まで、つまり平安京の東半分の死体が、計四万二千三百余体あつた。いうまでもなく、三月以前、六月以後に死んだ者も多いし、賀茂川の河原、その東の白河、あるいは朱雀から西の京、その他、方々の郊外まで加算したら、きりがないにちがいない。まして、畿外の諸国まで加えたら、どういうことにならうか。

崇徳天皇御在位の、長承年間とかに、やはり、こういう飢饉があったそうだが、当時のことは知らず、この目で見た養和の飢饉だけはたしかに、こんなこともあるかと思うようなものだった。

(後略)

- 参考文献：①神田・永積・安良岡編訳『方丈記・徒然草・正法眼藏隨聞記・勘異抄』日本古典文学全集 小学館
 ②永井路子の『方丈記・徒然草』集英社文庫
 ③安良岡康作『方丈記 全訳注』講談社学術文庫

同字(あじ)